

旧大橋図書館 120 周年記念事業

第 1 回講演会 2022.06.25

公共図書館の源流 大橋図書館  
--- 出版社のつくった図書館 ---

奥泉 和久

目次 1 はじめに / 2 大橋図書館の源流：1901 年まで / 3 開館から関東大震災まで：  
1902～23 年 / 4 震災復興から戦前期まで：1924～45 年 / 5 おわりに

## 1 はじめに

タイトルを「公共図書館の源流」として、大橋図書館の歴史的な意義を明らかにすることを本日のテーマとしたことについて。1902（明治 35）年 6 月 15 日、大橋図書館は開館式を行い、6 月 20 日閲覧を開始する。この当時、東京で初めて本格的なサービスをする公共図書館が出現した、と言われる。これが第 1 の理由。これにより東京市（当時、東京府東京市）でも公共図書館が認知されるようになり、大橋図書館の理事のひとりで市会議員坪谷善四郎が市会で市立図書館の設立を建議して東京市立日比谷図書館（現都立中央図書館）ができた。それだけでなく、その後市内の各区に市立図書館ができた。これが第 2 の理由。ほかのことも検討するが、まずはこの 2 点をもって大橋図書館が公共図書館の源流と言える、と考えているが、これらを可能にしたのはなぜかについて考える道筋を示す。

### 時期区分について

大橋図書館は、関東大震災で壊滅的な被害を受けた。そこで、震災を分岐点ととらえ、震災前の約 22 年を第 1 期、震災復興以降、戦前期までを第 2 期と区分した。博文館創業から設立に至るまでは、一出版事業者が図書館を設立する過程であり、前史と位置づけた。

前史：1901 年まで / 1902～23 年：震災前 / 1924～45 年：震災以降

### 公共図書館の源流、を分析する視点について

大橋図書館の成立事情（前史）は、やや図書館の歩みから離れるが、一出版社がなぜ図書館をつくったのか、答えを出すのはむずかしいが考えてみたい。大橋図書館を「公共図書館の源流」とするのであれば、なぜ東京で初めて本格的なサービスを実施できたのか、また、東京市立日比谷図書館設立へどのような影響を及ぼしたのか明らかにする必要がある。震災復興図書館については、時期的に源流と言えるのかとの見方もあろうが、大災害に遭遇した図書館がどのようにして復興を遂げたのか、現代的な視点を設定できるのではないかと考えてみた。

時間の関係で通史とはならないので、全体像を知りたい方は、参考文献の是枝さんの論考を参照されたい。本文中の文献を一部略記した。付録に年表を付した。

## 2 大橋図書館の源流：1901年まで

### 2.1 大橋佐平の「初志」の所在

大橋図書館の源流は、博文館だが、長岡時代なくして博文館の成功はあり得たのか。少々遠回りになるが歴史を遡ってみたい。その前に、図書館設立の趣旨を確認しておく。

- **大橋佐平**（おおはし さへい、1835－1901） 明治時代の実業家。越後生まれ。1881年長岡で「北越新聞」「越佐毎日新聞」を創刊。1886年上京し、博文館を創立。洋紙の博進社、博文館印刷所（共同印刷の前身）、書籍取次業の東京堂をおこす。1901年大橋図書館を創設。同年11月3日、67歳で死去。
- **大橋新太郎**（おおはし しんたろう、1863-1944） 明治期の実業家。父とともに博文館を設立し、日本有数の出版社とする。衆議院議員、のち貴族院議員。大日本麦酒、日本硝子など多くの役員。大橋図書館設立、震災復興時に私財を投じて経営を支えた。

佐平は、博文館の成功による利益を社会に還元する方途として図書館の設立を発案した。

#### 図書館設立の趣旨

図書館の社会文運の進歩に欠く可らざるは内外齊（ひと）しく認識する所、又区々の弁明を要せざる也、予明治二十年北越より出で、博文館を創設し、図書出版事業を経営すること茲（ここ）に年あり。顧みて特に標示すべき丕績（ひせき）なきを愧づと雖も、而かも図書の価格を低廉にし、一般社会に対して読書の範囲を拡張したるの一事は、聊（いささ）か心に安んずる所也。当時潜に以為（おもえ）らく、斯業若し聖世の余沢に潤ひて、幸いに成功するを得ば、希くは図書館を設立して謝悃（しゃこん）の微意（びい）を表せんと。其後明治二十六年出版事業取調べの爲め、欧米を巡察するに方（あた）り、各国の都市に図書館の設備完（まった）きを視て、初志益々切なりき。今や是の素志を貫徹するの時機漸く近づきたるを覚ゆ。……（以下略）

明治三十四年二月

大橋 佐平

（『四十年史』）

区々（くく：まちまち） 丕績（ひせき：偉大な功績） 而かも：それでも  
聊か：ほんの少し 余沢：先人の残した恩恵 謝悃（しゃこん：感謝のこと）  
素志：平素の志

#### 大橋新太郎

新太郎は、佐平から相談をうけたとき（佐平の欧米視察以前）、「直ちに同意」をしたという。その理由を次のように話している。公共事業について、佐平と価値観を共有していた。

国家教育の発達が、博文館の事業の成功した原因であります。して見れば博文館の事業は、国家教育の発達の結果により利益を収めておるのであって、決して自身並びに社員のみの尽力によってその事業が成功したわけではありませぬ。

（「大橋図書館開館の挨拶」『新太郎伝』より、『四十年史』にも収録）

## 2.2 佐平の長岡時代

### (1) 青年期まで

祖父は油商を営み娘(母)に婿(父)を取らせた。佐平はその母から熱心な教えを受けた。

- 
- 1835 (天保 6) [1] 越後長岡に生まれる 父は材木商  
1838 (天保 9) [4] 母から実語教(当時の教科書)および百人一首を習う  
1841 (天保 12) [7] 長岡の林忠左衛門に就いて読書と習字を習う  
1844 (弘化 1) [10] 長岡の大火、翌年父死去  
1849 (嘉永 2) [15] 京都智積院に叔父法如師を訪ね、四国・九州などを歴訪(～1850.2)  
1853 (嘉永 6) [19] 6.3 ペリー来航、藩医川上寿碩から海外事情を聞き、「地球図」を見る  
1856 (安政 3) [22] 酒造業を始める  
1864 (元治 1) [30] 母死去
- 

[ ] 内は佐平の年齢、数え年

母の遺言尚耳にあり

……かつて我を警めて曰く、家業素より欲する所あるべし。然れどもその業に正邪あり利害あり、他日汝実業家とならば、宜しくその業の性質を鑑み謹んで我が訓(おしえ)を忘ることなかれ、書籍業の如きは最も母の希望する所、また社会に益する所大なるべし、故に他を撰ばずして書肆を営むべしと諄々(じゅんじゅん)の言今なお耳底に存す。我ここをもつて母訓を守り書肆を営みまた公共の事業に傾意せり。

(「知自心百話」『佐平翁伝』)

諄々(じゅんじゅん)：よくわかるように 傾意：心を傾け尽くす

書肆は、書店のこと。知識・情報を広めることは社会貢献することを意味するとの趣旨か。

### (2) 幕末から維新後

新潟県の勤務は約1年、学校の世話掛などが約7年。佐平は、庶民を対象に、洋学を取り入れ、実学を重視した。並行して郵便事業を始め、交通路確保のため渡し船の営業にも着手。

- 
- 1866 (慶應 2) [32] 福沢諭吉『西洋事情』初編刊、佐平は長岡の書店で入手  
1868 (明治 1) [34] 1.3 鳥羽、伏見の戦い(戊辰戦争起こる)、5～7月官軍と長岡藩の戦い、佐平は恭順派有志と会合して官軍に和平を斡旋  
1869 (明治 2) [35] 2 新潟県に奉職(～12月)  
1871 (明治 4) [37] 10 有志と長岡小学校を開く(町人の子弟を集め、～1873)  
1872 (明治 5) [38] 長岡洋学校開校に世話掛として尽力(～1878)  
7 郵便取扱人となり自宅で郵便業務(～1877.12)、翌年長岡郵便局長  
1874 (明治 7) [40] 信濃川渡し船を運営(郵便取扱のため、1876年長生橋完成)
- 

注 1869年2月新潟県、7月水原県、新潟県を併合、翌年廃止新潟県。

### (3) 母の遺言に導かれ

この時期、出版業を開始し雑誌発行。次に雑誌・書籍の書店経営に主力を移す。母の遺言に導かれてのことか。さらには書店経営を新太郎に任せ、新聞を発行する。次から次へと新たな事業に着手しては、新太郎らが後始末(?)をするということもあったようだが……。

---

1875 (明治 8) [41] 佐平ら、この頃長岡出版会社設立、図書の出版(1877 年以降とも)

1877 (明治 10) [43] 『北越雑誌』(北越社) 創刊(～9 号、同年 12 月?) 佐平関与?

この年 雑誌の売捌きを開始(大橋書房、1878 年には書籍も)

1881 (明治 14) [47] 3 『北越新聞』(北越新聞社) 創刊、佐平内紛で脱退

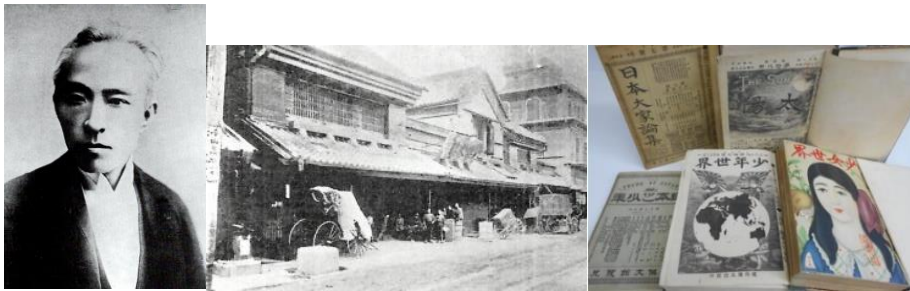
6 『越佐毎日新聞』(越佐新聞社) 創刊(～1890)、1888 年譲渡

1886 (明治 19) [52] 11 上京

---

## 2.3 博文館の創設

佐平は上京して博文館を興す。新太郎も上京、事業を拡大、出版文化の主役に。社名の由来は、河井継之助の設けた造士寮の寮則「博文約礼」による(稲川『龍(りょう)の如く』)。



左から 1 大橋佐平 2 1892 (明治 25) 年頃の博文館 3 博文館の出版物

### 創業から 15 周年まで

---

1887 (明治 20) [53] 6.15 博文館創業、『日本大家論集』刊

1893 (明治 26) [59] 3.30 出版事業視察のため欧米視察(～11 月)、図書館を見学

1895 (明治 28) [61] 従来の雑誌を『太陽』『少年世界』『文芸倶楽部』に集約して創刊

この年 退隠し、博文館の事業を専ら新太郎らに任せる

1898 (明治 31) [64] 5.24 同郷の大倉喜八郎還暦銀婚祝園遊会に出席、私立学校(大倉商業学校、現東経大)創設を披露(石黒が尽力)

1900 (明治 33) [66] 9 石黒を訪問、図書館のことを相談 図書 3 万冊をこの頃までに収集

1901 (明治 34) [67] 1 石黒を訪問 11.3 佐平没

1902 (明治 35) 6.15 大橋図書館開館

---

佐平は、博文館創立 15 周年に図書館設立を発意。信頼を寄せる同郷石黒忠憲(ただのり)に支援を仰ぐ。1901 (明治 34) 年 1 月、胃がんを宣告された佐平は、石黒を訪ねる。

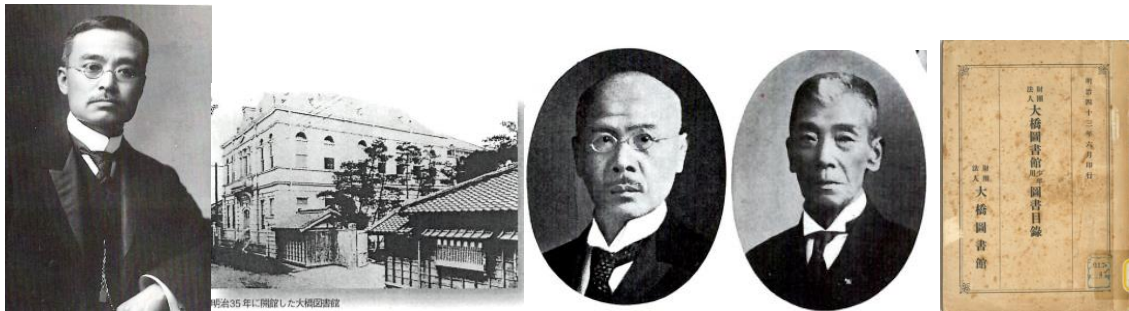
- **大倉喜八郎**（おおくら きはちろう、1837-1928） 大倉財閥の創設者。
- **石黒忠憲**（いしぐろ ただのり、1845-1941） 明治・大正時代の医師、軍人。1888年軍医学校長、1890年陸軍軍医総監、陸軍省医務局長。日本赤十字社長などを歴任。近代軍医制度の確立につとめた。陸奥伊達郡（福島県）出身だが、新潟に移る。

[1900（明治33）年9月の訪問時] そこで余[石黒]はこう考た。大都の書籍や、古昔珍奇の書籍を調べやうといふ人は、上野なりお茶の水なりの図書館に行くべく、日用切実の本を調べ読まふといふ人は、此の大橋図書館に来（きた）るべく……又子僧とか車を曳く輩（はい）とかいふ人が、門前に荷物を卸して、泥足のまゝで一寸入て……其事を翁[佐平]にいふたら、それは何より結構だから、いかにもそうしてもらいたいとて……  
（石黒「故大橋佐平翁の逸話」『太陽』8巻1号1902.1.）

### 3 開館から関東大震災まで：1902～23年

#### 3.1 開館時の状況

- 
- 1902（明治35） 5.25 協議員15名を委嘱 6.15 大橋図書館開館式 6.20 閲覧開始
  - 1903（明治36） 3.- 奨学閲覧券を発行（児童は無料で閲覧） 8.1 夜間開館実施（一部）  
8.1 日本文庫協会、第1回図書館事項講習会開催（～8.14・大橋図書館）
  - 1911（明治44） 1.6 館外帯出実施
  - 1912（明治45） 4.1 夜間開館、各閲覧室でも実施
  - 1915（大正4） 年度末の蔵書約7万冊
- 



4 1908年当時の大橋新太郎 5 大橋図書館 6 田中稲城 7 伊東平蔵 8 『大橋図書館少年用図書目録』

#### (1) 組織・経営

財団法人として認可。寄附行為証書によって運用することとなり、協議員15名を嘱託、このなかから理事5名などを選出。協議員に陸軍軍医総監・石黒忠憲、早稲田大学学長・高田早苗、帝国図書館長・田中稲城、帝国大学文学部長・上田万年、東京高等工業学校長・手島精一、東京高等商業学校長・寺田勇吉、安田銀行頭取・安田善次郎、大橋新太郎、大橋省吾、坪谷善四郎ほか5名。このうち石黒、上田、坪谷が理事を兼任。館長石黒忠憲、主事伊東平蔵（田中の推薦による）。1907（明治40）年度の財政状況は次の表1のとおり。

- **田中稲城**（たなか いなぎ、1856-1925） 当時、帝国図書館長。

- **伊東平蔵**（いとう へいぞう、1856～1929） 文部省勤務を経て、帝国教育会。1902（明治35）年大橋図書館主事。1906年9月東京市立日比谷図書館開設準備主事。数多くの図書館づくりに携わった。
- **安田善次郎**（やすだ ぜんじろう、1838-1921） 安田財閥の創設者。

表1 1907（明治40）年度財政状況

歳入		円	%	歳出		円	%
1	維持基本金収入	7,663	69.5	1	管理費	4,366	39.6
2	図書購入基本金収入	280	2.5	2	図書費	1,771	16.1
3	指定図書寄附金	1,000	9.1	3	指定寄附図書購入費	1,000	9.1
4	図書閲覧料収入	1,771	16.1	4	臨時費	400	3.6
5	雑収入	306	2.8	5	基本金繰込	3,483	31.6
	合計	11,021	100.0		合計	11,021	100.0

出典：『四十年史』 銭以下の単位は切り捨て 維持基本金収入：公債利子、会社利益配当金、銀行預金利子 管理費：報酬及び諸給与、保険料、修繕費など

維持基本金の運用収入で管理費をまかない、閲覧料収入を図書費に充当。支出全体の30%が基本金に繰り込まれ、これが年々増加、財政状況を安定させていた。「監事大橋新太郎、安田善次郎の二氏に嘱し、基本財産の運用を一任し、両氏は最も有利なる債権に放資し、殊に有利にして安全なる株式を選んで買い入れたる為」（『四十年史』）と説明。

(2) 利用の条件

大橋図書館 1回3銭 雑誌 1銭5厘

帝国図書館 普通3銭 20歳以上

日比谷図書館 普通2銭 新聞雑誌1銭 日比谷、深川以外無料（のち深川も無料に）

この頃 あんばん1銭、コーヒー3銭、そば（もり・かけ）2銭

(3) 施設・設備など

本館 木造2階建て 書庫 煉瓦造3階建て 建坪112坪 延べ267坪（約883㎡）

当初 和書3万冊 洋書2千冊 和雑誌3,300冊 外国雑誌500冊

大橋図書館平面図



左から 9 平面図 10 閲覧室（2F） 11 婦人室



左から 12 婦人室 13 新聞雑誌閲覧室 (1910-11 (明治 43-44) 年頃) 14 図書館事項講習会

2F 書庫 閲覧室 (168 席) 婦人室 記念室 貸付係室  
 1F 書庫 新聞雑誌閲覧室 (100 席) 貸出之間 事務室 食堂 玄関

2階が一般の閲覧室、婦人室は1/6くらい。写真左は子どもらしき姿 (『第5回年報』、1907年頃)、右は14人くらい (『第11回年報』、1912年頃)。1階が新聞雑誌閲覧室で手前に少年。夜間開館は、1903年8月、新聞閲覧室と「同室備付ノ図書、雑誌、新聞ノ外数学、理学、医学、法学ニ関スル図書」閲覧に限り実施 (午後6~9時)。1912年4月全館で実施。

#### 付記 図書館事項講習会

1903 (明治 36) 年 8 月 1 日から 14 日、日本文庫協会主催第 1 回図書館事項講習会が大橋図書館を会場に開かれた。同館主事伊東平蔵が講習会の開催を主唱、30名の募集に全国から54人が応募。1日平均3時間、講師には伊東平蔵 (図書館設置法)、田中稲城 (図書館管理法)、和田万吉 (目録編纂法、欧米図書館史) など協会草創期の図書館員らが名を連ねた。

### 3.2 利用状況

震災前、時期は不明だが「平日でも大抵は満員であつた。いわゆる弁護士や医師の卵がその半分を占めていたかもしれない」、また「当時の婦人室の利用はあまりにも少数だった」という (芝田清吾「大橋図書館の追想」『IFEL 図書館学』5号、1955.4)。開館当初は「婦人室の外は図書閲覧室満室」との札がかかっていたとも (「大橋図書館を観る」『教育学术界』7巻2号、1903.4)。1日当たりの閲覧者数の推移は表2のとおり。

表 2 大橋図書館 1日当たりの閲覧者数の推移

		閲覧者数の推移	備考
1903~11年	明治 36~44	209~287人	1908年日比谷図書館開館
1913~20	大正 2~9	300~400	震災前のピーク
1925~26	大正 14~15	11~15	関東大震災
1927~30	昭和 2~5	750~800	深川、京橋、一橋よりも早く復旧 来館者急増
1931~38	昭和 6~13	600人台	本館向いの軍人会館建設の喧騒のため
1939~43	昭和 14~18	700~900	連日満員かそれに近い状況

出典：『四十年史』

表3 東京市のおもな図書館閲覧者数の変遷

	帝国	大橋	東京市立	備考 (市立図書館)
1902年 (明治35)	138,650	64,350		
1903年 (明治36)	144,526	71,435		
1904年 (明治37)	137,364	70,951		
1905年 (明治38)	126,424	79,828		
1906年 (明治39)	195,344	81,084		
1907年 (明治40)	206,061	94,193		
1908年 (明治41)	226,254	91,590	21,045	11.26 日比谷開館
1909年 (明治42)	224,813	91,127	234,608	深川、牛込、日本橋
1910年 (明治43)	223,061	96,578	357,588	京橋、本郷、小石川、浅草
1911年 (明治44)	211,142	98,144	532,755	下谷他5館

出典：『図書館雑誌』16号 (1912.12)、『東京市統計年表』(第2回-10回) 東京市役所 (1904-1913.)

東京市立図書館が開館した後一時減少するが、表3のとおり増加に転じている。1912 (明治45) 年度の閲覧者数の職業別内訳は、学生：64,014人、官吏：3,359人、軍人：1,820人、実業家：5,554人、女子：4,984人、其他：22,381人、合計：102,112人 (『第11回年報』)。

震災前の利用のピーク時 (1921年度) における閲覧者数が表4。

表4 1921年の利用状況

館内		館外		合計	
男	女	男	女	男	女
102,740 (92.2)	8,633 (7.8)	21,878 (86.3)	3,465 (13.7)	124,618 (91.2)	12,098 (8.8)
111,373 (81.5)		25,343 (18.5)		136,716 (100.0)	

出典：『東京市統計年表』

閲覧者数は、開館時のほぼ倍で、女性の利用も増えている。館外貸出は、日比谷が貸出期間・図書の本数に応じて、料金・冊数が設定されていたのに対し、大橋図書館は保証金を5円 (帝劇特等席の料金に相当) 支払う必要があったが、館外貸出18.5%は日比谷の5.6%に比べ利用率は高かった。

児童サービスの開始は、1897 (明治20) 年に大日本教育会附属書籍館が「小学生生徒図書閲覧規則」を定め「諸学校長ノ認可証ヲ携帯シテ来館スヘシ」(第1条) (『大日本教育雑誌』66号, 1897.10) とした。これを踏襲か。大橋図書館では小学校児童尋常5年以上で成績優秀者の推薦を校長に依頼して「奨学閲覧券」を発行した。震災まで実施。『大橋図書館少年用図書目録』(1910) には約1,150冊を収録。奨学閲覧券の発行枚数は、500~1000程度。「壹年間ノ期限」(『第10回年報』) があるとされ、何回も閲覧できたようだ。1921 (大正10) 年が、計2,743人 (『東京市統計年表』) で、奨学閲覧券発行数の約2.5~3倍。市内児童の平均利用数は14,000人で、震災前の利用はあまり活発ではなかったようだ。

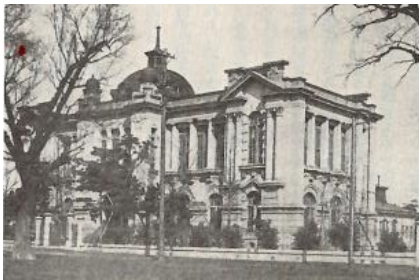


### 3.3 東京市立図書館設立の経緯

---

1900 (明治 33)	11.17	日本文庫協会、東京市立図書館設立について意見を提出 (p.84-85)
1901 (明治 34)	5.10	坪谷、東京市会議員に当選 (~1922.6)
1902 (明治 35)	10.10	東京市教育会長江原素六、市長に「通俗図書館設立建議」書を提出
1904 (明治 37)	3.7	坪谷、東京市会において通俗図書館の設置を建議、議決される
1906 (明治 39)	9.10	伊東平蔵、(大橋図書館を退職して) 東京市立図書館事務囑託
1908 (明治 41)	11.16	東京市立日比谷図書館開館式、11.21 閲覧開始

---



15 東京市立日比谷図書館

1900 (明治 33) 年に日本文庫協会が東京市に意見書を出したが、そのまま。坪谷が動く。

「市の役人が図書館の事を顧みぬも無理はない。当時の市会議員の多数が図書館とは如何なるものかさへ知らぬ位……私は東京市会議員在中此時ほど多くの同僚に頭を下げて賛成を求めて頼みまわった事は全くない」

(坪谷善四郎「東京市立図書館創立の由来」『図書館雑誌』29年12号, 1935.12)

坪谷は、大橋図書館の利用が、麹町、牛込、神田の3区で利用者全体の7、8割を占め、「図書館の利益を全市民に被らしむるには是非とも市立図書館が必要だと考えた」とする(『四十年史』は1904年度の数値を示しているが、それ以前から分析していたのであろう)。

東京市立図書館は、1906年11月、田中稲城、市島謙吉、坪谷といった図書館経営に関わりをもつ人びとを図書館評議委員に任命した。市島は、越後出身で初代早大図書館長。

「これはわが国の公立図書館ではみられなかったことであつた。……大橋図書館ではすでに実施されていた。」(『東京都教育史 通史編2』東京都立教育研究所, 1995.)

また、1915 (大正 4) 年 12 月、市参事会で坪谷が大正天皇即位礼に際し東京市へ下賜された 10 万円を基金としその利子で江戸誌料の収集を提案、可決 (大礼記念図書)。

■ **坪谷善四郎** (つぼや、ぜんしろう、1862-1949) 明治-昭和時代の出版人、政治家。越後国加茂の生まれ、東京専門学校(現早大)在学中に博文館入社。雑誌の編集に従事。大橋図書館理事・館長。この間1901年に東京市会議員となり、東京市立図書館の設立を建議。1904年3月議決、東京市立日比谷図書館開館を実現。

## 4 震災復興から戦前期まで：1924～45年

### 4.1 復興図書館開館

---

1922 (大正 11)	大橋図書館新館計画	震災前の蔵書	8万7千冊
1923 (大正 12)	5.-	日比谷図書館頭今沢慈海に顧問を嘱託、新館設計を決定 (7月用地登記)	
	9.1	関東大震災、全館、蔵書8万8千冊焼失、同日仮事務所を坪谷方に置く	
1924 (大正 13)	10.1	館外図書貸出事務を開始	この頃、震災後の収集により蔵書約1万冊
1925 (大正 14)	1.21	大橋会、第1回会合	
1926 (大正 15)	5.-	蔵書約4万冊	6.15 大橋図書館新築復興開館式
			7.1 一般閲覧開始
1928 (昭和 3)	1.1	東京市立図書館から竹内善作が転入、主事となる	

---



左から 16 復興大橋図書館 17 開館時と復興図書館の位置 18 復興開館当時の坪谷と石黒

#### (1) 新太郎の決意

復興開館式の挨拶で石黒はこう述べている。

「……大橋新太郎君は其本邸を焼きました上に、関係の建物が二十箇所も焼失したといふ中でありますから、此大橋君にむかつて、尊父の遺志を継がれてもう一度図書館を立ててくださいといふことは私としては申出難い為に、只々嘆息して居つたのである。然るに震災後四十幾日かでありました。新太郎君が拙宅へ来て申さるゝには、従来の図書館は烏有に帰しましたが、是は亡父の遺志である故新たに図書館を建て亡父の遺志を達せしめようと思ふから、相変らず御尽力を願いたいと申されましたので、私は殆ど落涙するやうな感じがしたのであります。

(石黒「建設と復興の始末」『四十年史』所収)

『博文館五十年史』は、「館主の命に依りて、公益事業は一日も勿[忽]諸にしがたしとして……」と記し、図書館の復興を優先したとする。忽諸(こっしょ)は軽んじること。

新太郎は、「父の遺志」と言っているが、それだけであろうか。新太郎は、佐平と相談して大橋図書館創設を決めた。ここで、新太郎の足跡も見ておきたい。佐平が開学に尽力した長岡小、長岡洋学校に通い、上京して中村正直の同人社で学んだ。学費が尽き帰郷した新太郎は、大橋書房を手伝い販路拡張のために越後・佐渡の有力者のもとに行商している。

## 新太郎の長岡時代 大橋図書館の源流（続）

- 1871（明治4）〔9〕 長岡小学校に入る  
1872（明治5）〔10〕 長岡洋学校に入る  
1876（明治9）〔14〕 上京して、中村正直の同人社の少年寮に入る  
1878（明治11）〔16〕 長岡に戻される  
1879（明治12）〔17〕 書籍販売業に従事、この頃から越後・佐渡の有力者を歴訪（～1881）  
1884（明治17）〔22〕 大橋新太郎編『改正徴兵令：傍訓』（大橋書房、32p）刊  
1888（明治21）〔26〕 上京

1894（明治27）年、新太郎は（中村から直接学んだであろう）スマイルズ（中村正直訳）『西国立志編』（1871 初版）を博文館から出版している。西洋思想を学び、自立した近代人を目指した彼は、図書館を都市社会における社会の基盤ととらえていたのではない。

### （2）利用の条件

入場料 児童室 2 銭 新聞雑誌室 3 銭 普通室 5 銭 特別室 10 銭（『復興の大橋図書館』、ただし、震災後に発行された『第21、22回年報』には、児童室について有料の記載はない）。

日比谷図書館 館内閲覧 普通 1回券 3 銭 特別 8 銭

### （3）施設・設備など

建築敷地 378 坪（=1,250 m<sup>2</sup>） 建築延坪数 886 坪（本館：575.4 坪、書庫：247.5 坪、附属屋：63.2 坪）（=2,930 m<sup>2</sup>）日比谷の 1.38 倍

鉄筋コンクリート造（耐火建築） 鋼鉄製書架 土地代・建築費 約 50 万円

参考：日比谷の建築延坪数 640 坪（2116 m<sup>2</sup>）（『東京市立図書館一覧 大正 9-10 年』）



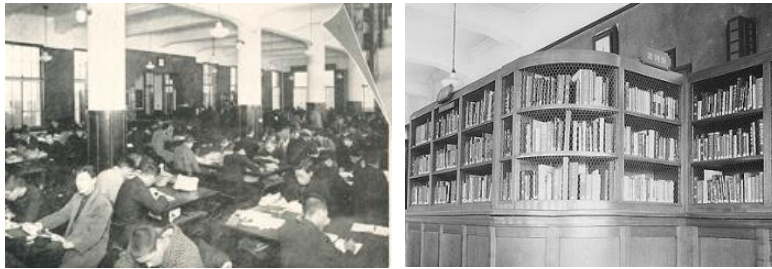
左から 19 目録室 20 婦人室（1927-28（昭和2-3）年頃） 21 特別閲覧室

復興開館時 定員 1928（昭和3）現在 合計 440 名

3 F	書庫 4	書庫 5	特別閲覧室（144）	婦人室（40）
2 F	書庫 2	書庫 3	普通閲覧室（216）	目録室 貸出室
1 F	書庫 1	児童新聞雑誌閲覧室（40）	館外貸出室	事務部門
B F	下足室	予備		

特別閲覧室と普通閲覧室の違いは、スペースの広さか（4人掛け）調度品の差か。新刊書

棚は、「我国に於る新しき試み」で「館外貸出書の陳列室を開放して」（『復興の大橋図書館』）自由を選択できるようにした（半開架式）。「主として今沢日比谷図書館頭の指導」（坪谷「通俗図書館創立の体験」『図書館雑誌』73号, 1925.1）による。1930、1931年に新調増加。



左から 22 普通閲覧室 23 新刊書棚

## 4.2 東京市のなかの大橋図書館

### (1) 竹内善作の転入と利用急増への対応

1927（昭和2）年、来館者急増のために児童室を閉鎖。翌1928年1月、竹内善作が東京市立図書館から転入。竹内は、図書分類変更着手するが、利用急増への対応に追われることになる。1941年までの十数年の間に部屋・収容人員の変更を11回行っている（『トピック』50号, 1941.6）。1937年当時は以下のとおり。

1937年（昭和12）現在 合計544名 復興開館時よりも104人増

3F	書庫4	書庫5	特別閲覧室 (184)	(新) 研究室 (3)
2F	書庫2	書庫3	(変) 新聞室 (32)	普通閲覧室 (234) 貸出室
1F	書庫1	目録室 (+案内所)	(移) 婦人室 (39)	館外貸出室 事務部門
B1	+書庫	下足室	(新) 学生自修室 (24、のちに閉鎖)	(復) 児童室 (60)

(新): 新設 (変): 変更 (移): 移設 (復): 復活



左から 24 個人研究室 25 目録室内の電話機 26 竹内善作 27 『トピック』創刊号

- 今沢慈海（いまざわ じかい、1882-1968） 当時、東京市立日比谷図書館館頭。
- 竹内善作（たけうち ぜんさく、1885～18950） 東京市立図書館では『市立図書館と其事情』（1921年創刊）の編集を担当、第一級品の「館報」に育てた。1928年大橋図書館に移り、同館を有数の参考図書館として運営した。
- 小谷誠一（おたに せいいち、1895-1979） 東京市立図書館に勤務。レファレンスサービスの普及促進に尽力。1937年大橋図書館に移り、1945年主事、1948年館長。

## (2) 参考図書館としての整備

1922（大正 11）年、大橋図書館は新館建設に動き出していた。翌 1923 年 5 月、日比谷図書館館頭今沢慈海に顧問を嘱託して新館設計を決定した。しかし、震災に遭遇、計画は白紙となったか、図面が焼失したかいずれかであろう。

震災後、竹内善作は「大正十四年三月大橋図書館の建築設計に関与」（竹内「その頃のことども」『図書館雑誌』35 年 10 号, 1941.10）したと記すが（今沢の指示か）、詳細は不明。

深川、京橋、駿河台が閲覧室と書庫を近接させ、安全開架式閲覧を採用したのに対し、大橋図書館は書庫出納とし、日比谷と同様参考図書館とすることが検討されたと推察される。

1930 年 11 月、研究室が新設された。12 月、目録室に電話を置き（日比谷図書館は 1915 年に実施）、質問を受けレファレンスサービスを開始したと思われる。表 5 は 2 年分の統計。

表 5 参考事務統計表

	図書に関する照会	目録に関する照会	その他	合計
1932（昭和 7）年	1,519	412	12	1943
1933（昭和 8）年	1,476	470	16	1962

出典：『第 25 回年報』

1937（昭和 12）年 9 月、『トピック』創刊。創刊に際し、坪谷はレファレンスサービスのガイドのためと発行の趣旨を述べている。利用案内、図書に関する質問への対応、参考図書の解題を含む資料案内、書誌の掲載、閲覧者との応答（「エコー」欄）など。『トピック』創刊の 3 か月後の 12 月には、東京市立図書館からレファレンスサービスを専門とする小谷誠一が転入。翌年、館内研修のための中堅会が組織された。

1938 年 7 月、書庫の増築工事が始まるが、このときに学生自修室を閉鎖。同年 11 月、図書予約閲覧の制度を設ける。①図書指定閲覧は、書誌事項がわかっている図書について閲覧の予約をする方法。②用件指定図書閲覧は、調査事項を記入して関係図書の選択を依頼する方法で、レファレンスサービスに相当。徐々に参考図書館としての機能が整備された。竹内は「私の在職中にこの規模が拡大出来、公共参考図書館として範を東亜に示すことが出来たとしたら無上の光栄である」（竹内、同上）と述べている。

## (3) 児童サービスの位置づけなど



左から 28 『まあい・てえぶる』 29 児童室 30 憲秩素本 31 金庫室

1929（昭和4）年、柴野民三が採用された。児童室担当となるが、児童室は閉鎖されていたはずである。1930年11月、地階に児童室が復活、独立室となる。柴野は『まああるい・てえぶる』を作成したという（渡辺玲子『みんないっしょに』文芸社, 2011）。利用案内、児童の作品、柴野ら職員の作品なども掲載。柴野は、童話作家となるため1937年に退職した。

1937年の大橋図書館の児童の利用数は、男女合わせて11,416人（『第29回年報』）で、日比谷の約35,000人に遠く及ばない。市立図書館の平均約1万数千人をやや下回る。

この頃の活動を検証した報告がある。高橋辰男「児童室の子供達」『努力』（第8号, 1939.12）で、同誌は、1938年に組織された大橋図書館中堅会の報告書。高橋は、東京市立図書館から転入したばかりで、こう述べている。どの館にも常連はいるが他館では毎日、あるいは隔日に来館するが、大橋では5日か1週間に1回。その理由を、周囲の2/3は住宅地域ではなく、半径1kmには住宅が少ないこと。本区、隣接区の利用が大半を占めるが、35区のうち20区くらいから集まってくる。これは他の児童室には見られない傾向である、と分析。

では、参考図書館になぜ児童室を設けたのか。宮沢泰輔は次のように述べている。

「児童中心というか、児童を大事にして、児童の図書館がよくならなければ大人の図書館もよくなれない、そういう考え方に信念をもっていましたね。だから児童室経営とか、設備とか、そういうことには全力をあげたんです。」

（石井富之助 [ほか] 「竹内善作を語る（2）」『図書館雑誌』61巻11号, 1967.11）

■ **柴野民三**（しばの たみぞう、1909-1992） 昭和・平成期の児童文学作家、童謡詩人

■ **宮沢泰輔**（みやざわ たいすけ、1904-1980） 東京市立図書館。のちに都立日比谷図書館などに勤務。

この時期、もうひとつ押さえておくべきこと。当時は国家による検閲が行われていた。三康図書館では、法律や秩序を乱す（紊乱）とされ、「閲覧禁止図書」に指定された図書を「憲秩紊本」（けんちつびんぼん）と称し、継承している（三康図書館HP）。エピソードがある。

「戦時中、大橋図書館の主事竹内善作氏は、同館に憲兵が来館し発禁図書の提出を強要しても、なにかと理由をつけて、金庫のような扉のある書庫へは一步も入れなかったという話を、筆者は、評論家の神崎清氏からお聞きしたことがある。」（清水正三『戦争と図書館』白石書店, 1977）

大橋には「金庫室」があり、そこへ本を移したのではないか。書庫へは入れて、自由に探させたのではないか。「金庫室」の入室は断れるように思える。

このことと関連して、坪谷は次のように記している。坪谷が退職する1年前の記事である。

「官公立図書館は公衆に閲覧せしむることだけを禁じ、其の図書は其の館内に保存を許すも、私立図書館の分は一切自発的に警察署へ差出すべきことを命ぜられて居る相だ……差出した上は焼棄せらるゝであろうなどゝ聞くと、後世に残すべき文献が消滅

し、取返しがつかぬことになる」(坪谷「播粉木の重箱掃除」『図書館雑誌』37年7号, 1943.7)

とすれば上の竹内の対応は、個人としてではなく、大橋図書館としてのように思われる。

## 5 おわりに

大橋図書館の創立者大橋佐平は、青少年期には、町人としての教育を受け、世の中の動向に関心を示していた。戊辰戦争後の長岡の復興には、教育を最優先に考え、学校教育に従事した。次いで郵便事業など。その後、新聞、雑誌、図書の出版・販売に携わり、上京して博文館を創業した。坪谷はこれらに共通しているのは、人材養成だという(『博文館五十年史』)。佐平が、時代の変革期において教育、情報の重要性を認識していたことは明らかで、博文館の事業はその集大成と言ってよく、これらは大橋図書館の「源流」を考える手掛かりになるのではないかと。

大橋図書館は、首都東京の都市化が進むなか、佐平が提唱したとおり地域の通俗図書館としてサービスを展開した。文教地区に立地したことから、学生などの利用者が押しかけた。このことは図書館ができれば多くの市民が利用することを実証した。それが坪谷善四郎により東京市立図書館の建議となり、東京市内のすべての区に図書館ができることとなった。

震災後に関しては、別の角度から大橋図書館の活動を見ておきたい。表6は、1936年の文部省の全国調査で、蔵書数が大橋図書館よりも上回る、道府県立、市立を比較したものであるが、大橋図書館の震災後10年余の復興のスピードがいかに驚異的だったかがわかる。

表6 蔵書数上位の図書館との比較

	蔵書数(冊)	図書費(円)	閲覧人員(1日)	閲覧図書(1日)	職員数(総数)
道府県 大阪府立図書館	247,632①	27,349①	1,264①	2,021①	90①
道府県 岡山県立図書館	138,582②	4,500⑤	687④	916⑤	21⑥
道府県 京都府立図書館	137,805③	10,800③	399⑥	138⑥	30⑤
市立 東京市立日比谷図書館	185,259①	不詳	913③	1,107④	35④
市立 名古屋市立図書館	135,468②	13,000②	954②	1,611②	56②
私立 大橋図書館	132,952	10,000④	675⑤	1,580③	40③

出典：『全国図書館に関する調査：昭和11年4月現在』日本図書館協会, 1978 (1936年文部省刊の複製版)

大橋図書館には、閲覧料を払ってまでも利用したいという人びとが足を運んだ(日比谷以外は無料)。さらには高額な保証金を預けてまでも多くの人が館外貸出をした。わざわざ遠くから(地域に図書館があるにもかかわらず)通った児童も少なくなかった。それほどまでもして利用するに値する図書館だった、ということになるのか。では何がそうさせたのか。第1に、豊富な資料、第2、整備された施設・設備、第3、サービスの充実につとめる専門性を有するスタッフの存在ではないか(具体的に見てきたとおりであり、現在われわれは、これを図書館の3要素と呼ぶ)。

震災後は、東京市立図書館からの転入者による功績が大きいですが、坪谷にしてみれば、自分

がつくった図書館で育った図書館員ということになるであろうし、竹内らもそのように考えて、大橋図書館の門を叩いたかもしれない。大橋図書館という公共事業を提起した大橋佐平・新太郎父子に対して、社会が変化するなか時代にふさわしい図書館づくりを実践した。その累積が、「公共図書館の源流」と呼ぶにふさわしい活動を生みだした、ということになるのではないか。

## 参考文献

- ・『大橋図書館年報』第1回-33回, 1903-1942.
- ・坪谷善四郎『大橋図書館四十年史』博文館新社, 2006. (博文館 1942年刊の複製版) (『四十年史』)
- ・『復興の大橋図書館』大橋図書館 1926.
- ・佐藤政孝『東京の近代図書館史』新風舎, 1998. (大橋図書館についての記述がある)
- ・是枝英子「大橋佐平と大橋図書館」『大倉山論集』55号, 2009.3.
- ・吉田昭子「伊東平蔵とその実践的図書館思想」『Library and Information Science』No. 67, 2012.6
- ・奥泉和久「大橋図書館 成立事情とその背景」『法政大学資格課程年報』10巻, 2020年度, 2020.3
- ・坪谷善四郎『大橋佐平翁伝』栗田出版会 1974. (『佐平翁伝』)
- ・稲川明雄『龍の如く：出版王大橋佐平の生涯』博文館新社 2005.
- ・坪谷善四郎『大橋新太郎伝』博文館新社 1985. (『新太郎伝』)
- ・石黒忠恵『懐旧九十年』岩波書店 1983. (岩波文庫)
- ・坪谷善四郎『博文館五十年史』博文館 1937.
- ・山口昌男「明治出版界の光と闇：博文館の興亡」『「敗者」の精神史』岩波書店 1995.
- ・田村哲三『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影：博文館興亡六十年』法学書院 2007.
- ・浅岡邦雄「長岡における大橋佐平・新太郎父子の出版活動」『日本出版史料』8, 2003.5.
- ・長岡市編『長岡市史 通史編 下巻』長岡市 1996.
- ・結城伴造『長岡の教育百年』野島出版 1969.
- ・長岡市編『長岡市史 通史編 下巻』長岡市 1996.
- ・長岡市編『ふるさと長岡の人びと』長岡市 1998.

## 図版出典

- 1 『四十年史』
- 2 『博文館五十年史』
- 3 三康文化研究所附属三康図書館 HP
- 4 『新太郎伝』
- 5-7 『四十年史』
- 8 『大橋図書館少年用図書目録』
- 9 『四十年史』
- 10 『第9回年報』
- 11 『第5回年報』
- 12 『第11回年報』
- 13 『第9回年報』
- 14 『四十年史』
- 15 『近代日本図書館の歩み 地方篇』日本図書館協会, 1992.
- 16-18 『四十年史』
- 19 『第25回年報』
- 20 『第22回年報』
- 21 『第23回年報』
- 22 『第21回年報』
- 23 三康図書館 HP
- 24 『第26回年報』
- 25 『トピック』48号
- 26 石井富之助 [ほか]「竹内善作を語る (2)」『図書館雑誌』61巻11号, 1967.11
- 27 『トピック』創刊号
- 28 『まあるい・てえぶる』創刊号
- 29 『第25回年報』
- 30 三康図書館 HP
- 31 『四十年史』